



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 170号 2010.10.12 発行 社会政策研究所

=====

全国紙が休刊日の本日ですが、ウェブ版やローカル紙から知的障害者の元気なニュースを拾ってみました。【kobi】

韓国で知的障害者交流 北九州から37人

朝日新聞 2010年10月12日



韓国での発表にむけて、北九州市手をつなぐ育成会の韓国人職員と打ち合わせをする川添兼吾さん(左) = 7日夜、戸畑区

■交流会、スピーチや歌を披露

北九州市の知的障害者と支援者ら計37人が、韓国・ソウル市で12日に開かれる知的障害者同士の日韓交流大会に参加する。日本側の障害者は大半が初めての海外旅行で、国際交流を楽しみに準備を進めている。(河原一郎)

参加するのは社会福祉法人の北九州市手をつなぐ育成会。障害者26人と職員11人が1

1～13日の日程で訪韓。12日の大会では障害者3人が趣味や仕事について話す個人発表のほか、団体で大正琴や韓国の歌、ソーラン節などを披露する。日韓の計約340人が参加予定という。団長の北原守理事長は「知的障害者は海外に行く機会が少ないので、彼ら自身のやる気を高め、人生の向上につながるのを期待している」と話す。

日明りサイクル工房(小倉北区)に勤める川添兼吾さん(34)は、すべて韓国語で個人発表をする。卓球の全国大会準優勝の経験やパソコンの資格試験、韓国の歌をカラオケでうたうこと、絵画の趣味などについて話すつもりだ。

韓国のテレビドラマに感動したのがきっかけで、3、4年前から韓国語を学んでいる。「あがるタイプなので、練習でここまででいいと思ってしまえば本番はアウトです」。韓国語の原稿を練り直し、朗読の練習を繰り返している。

昨年8月、北九州市での交流大会で知りあった韓国人の友人とも再会する。川添さんは「韓国の友人との交流も楽しみだし、本場の韓国料理の辛さも確かめてみたい」と楽しみにしている。

バス車内清掃を体験・知的障害者が職場実習

東武よみうり 2010年10月11日(草加市)

東武バスセントラル株式会社草加営業事務所でこのほど、障がい者の社会参加と就労に

向けた、職場実習が行われた。草加市柿木町の東部障がい者就業・生活支援センターみらい（宮田敏男所長）が同社に依頼し、草加市内の知的障害者授産施設・つばさの森、希望の家と協力し実現した。

この日は3人の知的障がい者が参加、乗り合いバスや高速バスの社内清掃業務を体験した。ふだん、自分たちも利用しているバスということもあり、ほうきとちりとりなどでそうじする姿は熱心だった。参加者は「自分たちが清掃したバスが市内を走るのでうれしい。お客様に気持ちよく使ってもらえるよう頑張りました」とふだんの作業と違う良い刺激を受けたようだった。同社草加営業事務所の岡本所長は「ふだんの業務でも障害者の方と接する機会もあるので従業員の理解が深まれば」と話していた。

景気低迷の社会情勢の中、障害者の就職は厳しい。同センターみらいの斉藤幸子副所長は「企業にとっても厳しい状況だが、障害者への職場の理解や少しの配慮がいただければ、十分戦力として企業でも働けます」とアピールする。同センターでは、草加、越谷、三郷八潮、吉川、松伏の6市町の障害者からの就職に関する相談や企業からの障害者の雇用相談を随時受付中。



<問い合わせ> 東部障がい者就業・生活支援センターみらい TEL 9 3 5 ・ 6 6 2 1。

障害者就労支援、軌道に

中国新聞 2010年10月12日

エンジェルの大原聖二さん（左）に教わりながら、真剣な表情でクッキー生地を丸める田中君

岩国市のボランティアグループ「コンチェルト」の障害者就労支援活動が、軌道に乗ってきた。障害者の職場体験を受け入れてくれる企業、事業所とを結ぶコーディネート役を始めて約1年。協力企業や事業所が12カ所になった。

グループは2009年3月に結成。ピアニストの中村桂子さん(33)を会長にメンバーは10人。「障害者も健常者も境のない世の中に」と、障害者も参加する福祉コンサートの開催を中心に活動してきた。約1年前から障害者の社会参加を促すため、職場体験の受け入れ先の確保に力を入れてきた。

9月中旬にあった職場体験実習には、岩国総合支援学校の生徒2人が参加。同市麻里布町の古書販売店「文化教材社」では、中学部3年松下大輔君(15)が古本の荷積みや本棚の整理に約2時間汗を流した。「無事にやり終えてほっとした」と松下君。ケーキショップ「エンジェル」では、同田中奨君(14)がクッキー作りを体験した。

会長の中村さんは「実習先での体験を基に障害者が自信を深め、将来の就職への道につながれば」と願い、企業などに職場体験の受け入れ協力を呼び掛けている。



自立支援へ職場協力 一関市の常磐パッケージ

岩手日報 2010年10月12日

段ボール包装材などを製造販売する一関市山目の常磐パッケージ一関事業所（本社福島県、熊谷健也事業所長）は、市内の障害者通所授産施設と請負契約を結び製品生産している。作業場を無償貸与し、授産施設利用者に「職場」として提供。利用者は一般企業での就職を目指し、意欲的に仕事に励んでいる。

作業場は同事業所の一角。同市萩荘の知的障害者通所授産施設ブナの木園（小野寺毅園長）の20～50代の利用者7人が、大きな窓を段ボールに収容する際に四隅を固定する段ボール材などを手際よく組み立てる。同事業所の作業服を着て張り合いをもって仕事に励む。

堀越進さん（27）は全盲。それでも素早い動作で製品を丁寧に仕上げる。「最初からできないと思えば何もできない。苦手なものがあってもあきらめない。何より楽しく仕事できてうれしい」と意欲的に語る。一般企業で就職を目指す。

同社と同施設は請負契約を結び3年目。同施設は当初2年間国の助成金を活用し、障害者を指導する訓練担当者2人の人件費に充て、同社には作業所の賃貸料を納めていた。

本年度からは、国の助成は打ち止めとなったが、同社と同事業所は請負契約を継続。同社は作業所を無償で貸している。訓練担当者は1人になったが自立支援体制を守ろうと契約を継続した。

一関広域障害者就業・生活支援センターメイフラワーの小山芳信所長は「施設利用者は実社会で働く実感を持ち仕事に励んでいる。生き生きと自立を目指すことができる環境は貴重」と強調する。

熊谷事業所長は「1964年に一関に進出して以来、地域に根差して事業に取り組んできた。地域貢献として施設との事業を続けることが社の方針。しっかり続けていきたい」と今後も継続を誓う。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行